

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「食べられる防災ブック セブンイレブン 缶詰・備食本セットで8640円」
- 2) 「レストランの売れ残りメニューを割安で販売するアプリがボストンで誕生」
- 3) 「ゴミを捨てる時に買い物リストを自動作成できる“Genecan”」
- 4) 「重さから食品や消耗品の残量を把握し買い物リストを作成する“Shoppers List”」

1) 「食べられる防災ブック セブンイレブン 缶詰・備食本セットで8640円」

セブンイレブンは防災マニュアルと缶詰、白米を組み合わせた「東京備食セット」（8640円）の予約受け付けを始めた。セブン&アイ・ホールディングスの通販サイト「オムニセブン」を通じて8千セット限定で販売し、3月中旬から順次、全国のセブンイレブンの店頭で受け取れる。

2015年に東京都が全世帯に配布し話題を呼んだ「東京防災」の制作チームが手掛けた。備蓄のチェックリストや災害時のアイデアレシピを載せた1冊約70ページの「東京備食ブック」入り。

缶詰はシェフが監修し、食品卸大手の国分グループ本社が製造した。主菜、副菜、汁物、デザートを3食分そろえ、成人が1日に必要な約2千キロカロリーを取れるという。備蓄食とは思えないぜいたくさをコンセプトに、主菜として「うなぎのかば焼き」や「霧島黒豚角煮たまねぎソース」などを用意した。

東京防災は全国の書店で発売されるなど、防災意識を高めるきっかけとなった。備蓄食として利用できるデザイン性を高めた防災グッズとして、家族向けだけでなく贈答用の需要も見込む。

実際に経験しないと備蓄の大切さに気づけず、なかなか防災セットを用意するきっかけがない人が多いかもしれない。そういうものこそ手に取ってもらえるようなデザインや特徴ある中身が大事だと言える。少し値が張るが、これが備蓄食を考えるきっかけにもなりそうだ。

2) 「レストランの売れ残りメニューを割安で販売するアプリがボストンで誕生」

食料廃棄削減連合（FWRA）によると、米国の飲食店が排出した食料廃棄物のうち、寄付もしくはリサイクルされている割合はおよそ15.7%。

飲食店が余剰食料をチャリティなどに寄付する“フードバンク”の仕組みは、米国でも確立されつつあるが、食料の回収や運搬のための人員確保やコストが障壁となり、その取り組みは、まだ限定的なのが現状だ。

一方で、米ニューヨークの「PareUp」や、2016年7月に米国へ進出した「BuffetGO」など、一般消費者に余剰食料を値引き販売するためのサービスも、欧米の大都市を中心に広がっている。

米ボストンで、売れ残った料理を割安価格で販売したい地元の飲食店と一般消費者をつなぐスマホアプリ「Food for All（フード・フォー・オール）」の開発がすすめられている。このアプリでは、現在地周辺で売れ残りメニューを販売している飲食店を検索したり、オンラインで発注することが可能。

とりわけ、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学（MIT）といった名門校が集まるボストンでは、多くの学生から人気を集めそうだ。

「Food for All」は、ハーバード公衆衛生大学院との提携のもと、2016年8月から、ボストン市内30軒以上の飲食店でベータ版として試験的に運用されている。2017年には、ボストン市で正式リリースするほか、ニューヨーク市にも展開する方針だ。現在、キックスターを通じて、5万ドル（525万円）を目標に、アプリ開発やビジネスモデルの検証などに必要な費用を募っている。

日本でも長い間「食品ロス」の問題提議され続けているが、様々な取り組みの中でも中々定着しづらいように思える。やはり自分に得な部分がなければ難しいのかもしれないが、レストランで出されているものが半額や80%OFFで食べられるとなれば利用する人も多そう。今はまだ米のみだが、一番取り入れやすいアプリのツールを使っただけの取り組みであれば日本でも定着するのではないだろうか。

3) 「ゴミを捨てるときに買い物リストを自動作成できる“Genecan”」

私たちの日常生活に欠かせない食料品や日用品などの最寄品は、できるだけ効率的に調達したいもの。しかしながら、家庭にあるすべての最寄品の在庫状況を常時把握することは、意外と難しい。

そこで、“モノを捨てる”という日常の動作と連動させ、買い物リストをシームレスに作成できるスマートガジェットが、「Genecan」である。

「Genecan」は、市販の角形ゴミ箱に装着できる、WiFi対応のデジタルガジェット。食品や日用品のパッケージを捨てる際、ゴミ箱の側面に装着したこのガジェットの前に商品バーコードを数秒かざし、読み込ませると、クラウド上の買い物リストにその商品が追加される仕組みだ。

また、野菜や果物など、バーコードのない商品は、「Genecan」に商品名を話しかけるだけで、「Genecan」がユーザーの音声を認識し、買い物リストに追加してくれる。

ユーザーは、専用のスマホアプリを介して、いつでもどこからでも、「Genecan」の買い物リストを閲覧したり、その内容を編集することが可能。さらには、この買い物リストを家族間で共有することもできる。

現在、1台124.99ドル（約1万4,600円）で予約販売を受付中だ。

商品バーコードを読み込ませたり、商品名を話しかけるといった“一手間”が必要であるものの、ゴミを捨てるタイミングで、その商品の購入の要否を判断し、忘れてしまわないうちにハンズフリーで買い物リストに記録しておけるのは便利。

「Genecan」は、家事の何気ない手間や煩わしさを解消するIoT志向のガジェットとして、興味深い。

日用品の在庫をいちいち記憶したりメモしたりしなくても良いのは些細な事だがとても助かる。最後の一つを自分以外の家族が使い切って、その報告がなかったために次に使う時に「在庫がない！」ということもあると思うので、こうしたツールがあれば家族間の連絡漏れも防げて陰湿なムードにもならなくて済む。是非我が家にも欲しいと思った。ただ、IoTの進化で生活がどんどん便利になるのは嬉しいが人間が退化しないようにだけはしなければ…とも感じた。

4) 「重さから食品や消耗品の残量を把握し買い物リストを作成する“Shoppers List”」

食品や消耗品の重さを量って残量を判断し、買い物リストを自動的に作成してくれるスマートホームデバイス「Shoppers List」がIndiegogoに登場した。

Shoppers Listは、3インチ（約76mm）角の小型スケール（はかり）「mini weight pad」と、スケールで量った重さをスマートフォンに送信するアンテナ装置「Shoppers List Antenna」で構成されるスマートホームデバイスだ。

mini weight padを台所や食品棚などに敷き、その上に食品や消耗品を置いておけば、残量が不足したアイテムのリストがスマートフォンのアプリに自動的に作成される。また、新たにリスト入りしたアイテムがあれば即座に、それを伝えるための通知音が鳴る。そのため、食品や消耗品の買い忘れ防止に役立つという。

mini weight padはマグネットで連結できるため、バスケットのような大きな器に入れた物の量も計量できる。また、耐水性や耐低温性があり、浴室などの多湿環境のほか、冷蔵庫や冬の屋外などの低温環境でも使える。マイクロプロセッサとBluetoothモジュールを搭載し、3Vのボタン電池（CR2032）で12カ月動く。

Shoppers Listは2017年1月下旬までクラウドファンディングを実施。12月30日時点では、目標額の1000ドル（約12万円）に対して、約520ドル（約6万1000円）を集めている。

Shoppers Listの販売価格は、mini weight padの数に応じて変わる。10個付きが94ドル（約1万1000円）、30個付きが234ドル（約2万7000円）、60個付きが444ドル（約5万2000円）、90個付きが654ドル（約7万7000円）となる。出荷は2017年9月以降の予定で、日本への送料は無料だ。

なくなっていたことは覚えていてもそれが何の商品だったのか思い出せないことも多々ある。そういうときにスマホにリストが自動作成されるのは嬉しい機能だ。決めた場所に戻すという習慣付けにもなるし、住宅内だけでなく舗にも応用できそうなシステムだ。上記（3）のニュース同様、生活とデジタルが融合したIoTツールは今後ミレニアル世代の生活スタイルに合った形で普及していくと思われる。